

「コーダ」のぼくが見る世界

聴こえない親のもとに生まれて

はじめに 聴こえない親のもとで育つ、聴こえる子ども

「ぼく、コーダなんです」

初対面の人にそう自己紹介すると、ほとんどの人から「コーダって、なんですか？」と訊き返される。それも仕方ないことだ。日本ではまだ、あまりにも知られていない。コーダではない人たちが「コーダ」という言葉に偶然出合う機会が滅法少ないうえに、コーダ自身も、自分が「コーダと呼ばれる人間」であることを知らないケースだって珍しくない。

かくいうぼくも、自分がコーダだと知ったのは二十代半ばの頃だった。たまたま参加した手話サークルで自身の生い立ちについて話したところ、「じゃあ、あなたはコーダなんだね」と指摘されたのがきっかけだ。

コーダとは「Children of Deaf Adults (チルドレン・オブ・デフ・アダルト)」の頭

文字（CODA）を取った言葉だ。これは「耳が聴こえない、あるいは聴こえにくい親のもとで育った、聴こえる子どもたち」を意味する。つまり、ろう者難聴者の親を持ちながら、自分自身は聴こえるという子どものことだ。

そう、ぼくの両親は耳が聴こえない。ぼくはろうの親のもとで育てられた、コーダなのだ。

ぼくの父はもともと聴者として生まれた。音を聴き、言葉を喋ることになんの問題もなかった。しかし、まだ小学生にもならない年齢の頃に結核にかかり、生死の境をさまよったという。懸命な治療の結果、父は一命を取り留めたが、後遺症として聴力を失った。

一方、母は生まれつき聴こえない、先天性のろう者だった。だから、父とは異なり、母は音を知らずに育った。さまざまな生活音——たとえば、背後から迫る自動車のエンジン音、来客を知らせるインターフォン、道を行き交う人々の雑談、テレビから漏れる笑い声、そして、我が子であるぼくの声などが、母の耳には届かなかった。いまでもこそ、補聴器をつけて多少は反応できるようになったみたいだけれど、その一つひとつを正確に聞き分けることは難しい。

幼少期の病気によって音を失った父と、最初から音のない世界に生まれた母。ぼくはそんなふたりのもとで、「聴こえる世界」と「聴こえない世界」を自然と行き来しながら育った。

ぼくのように聴こえない両親を持つコーダのことを、Hearing, Mother Father Deaf (ヒアリング・マザー・ファーザー・デフ)とも呼ぶ。とはいえ、それだけがコーダなのではない。コーダのなかには、片方の親だけがろう者難聴者だというケースも存在する。要するに、「親のどちらか一方、あるいは両方が聴こえない、あるいは聴こえにくい」ことが、コーダの定義だと言えるだろう。

両親とも先天性のろう者なのか、あるいはどちらかが後天性なのか。ろう者と難聴者なのか、ろう者と聴者なのか。その組み合わせによって多少変動はあるものの、ろう者難聴者からコーダが生まれる確率はおよそ九割だという報告がある。その確率を踏まえ、日本国内のコーダの人数を計算すると、少なくとも二万二千人のコーダが存在すると推定されるという。

そのうちのひとりが、ぼくというわけだ。

そんなマイノリティであるコーダについて知ってもらいたくて、本書のもととなる連載の執筆を開始した。コーダとして生まれたからなのか、あるいは持って生まれた

気質のせいなのか、そのあたりはコーダ以外の人生を歩んだことがないためわからな
いのだけど、ぼくはこの社会で起こるさまざまな問題について考えあぐねてしまうと
ころがある。本書ではそんな思考の過程や、考えても答えの出ない問題についても
綴^{つづ}った。

本書を通じて、コーダのことを理解してもらおうのはもちろん、ひとりのコーダから
見た社会の側面も知ってもらえたら幸いだ。

C O N T E N T S

はじめに 聴こえない親のもとで育つ、聴こえる子ども

3

I

1 聴こえない親との関係

12

2 ラベルがもたらす安堵感あんど

23

3 コーダはヤングケアラーカー

33

II

4 手話とはなにか

42

5 親との言語を取り戻す

56

6 音楽との付き合い方

70

7 作品に描えがかれるマイノリティ

84

8 「知る」だけで終わらせない

96

III

12	11	10	9
もしも親が聴こえたら	父について	コーダと家族	テクノロジーとコミュニケーション

おわりに コーダを生きる

参考・引用文献

コーダをもっと知りたい人へ

ILLUSTRATION

KIGIMURA

BOOKDESIGN

ALBIREO

1



1 聴こえない親との関係

コーダという言葉は1983年にアメリカで生まれた。いまから41年前のことであり、まだ半世紀も経っていない。そう考えると日本に浸透していないのも頷ける。

けれど、アメリカではコーダの研究が盛んだ。CODA International（コーダ・インターナショナル）という組織があり、コーダに対するサポート体制が整えられている。また、経済的に困窮しがちなコーダを支えるため、進学のための奨学金制度も立ち上げられたという。

どうしてコーダをここまでサポートしなければならぬのか。「障害があるのは親であって、コーダ自身は聴こえるのだから、生きるうえでなんの問題もないだろう」と考える人もいるかもしれない。その意見も理解できる。けれど実は、コーダにはコーダ特有の問題がある。そこになかなか目を向けてもらえないからこそ、コーダ当事者はたったひとりで困難を抱えがちだ。よく自身もそうだった。

幼少期のコーダにとって 親が聴こえないことは

幼少期、小学校に上がる前くらいまでのコーダの家庭は、時折、「理想的」とも評される。聴覚障害のある親は聴こえる家庭と比べても遜色のないよう、大切な子どものために生活に工夫を凝らす。コミュニケーション不全が起きてしまう可能性もあるため、人一倍、子どもの「声」に耳を傾けようともするだろう。その親子関係には愛情が満ち溢れており、それが理想的と言われる所以だ。

ぼく自身を振り返ってみても、たしかに幼稚園に通っていた頃は両親との関係が非常に良好だったと記憶している。母は手話で一生懸命話しかけてくれ、ぼくも自然とそれを身に付けていった。もちろん、その時点で完璧な手話が使えていたわけではない。どうしてもうまく意思を伝えられない場面も多々あった。けれど、母はぼくとのコミュニケーションを諦めず、うまく発音できないものの音声での会話（口話）も取り入れてくれていた。もう少し成長すると、そこに筆談も加わる。手話、口話、身振り、筆談と、ぼくの家庭にはさまざまなコミュニケーション方法が存在していた。

アクティブな父は、休日になるとぼくをさまざまなところへと連れ出してくれた。虫捕り、山菜採り、釣り、海水浴や潮干狩り、ドライブに遊覧船での島巡り……。一つひとつの思い出を語ればきりがないほどだ。ときには母が弁当を作ってくれ、三人で出掛けることもあった。ハンドルを握る父と、助手席で笑っている母。後部座席から見るふたりはとても楽しそうで、ぼく自身もまた、そんな時間が愛おしかった。

そのようにたくさんの愛情を注いでくれるふたりにもできないことがあった。それはいつだって、「音」を伴うことだった。たとえば、電話が鳴っても気づかない。それどころか、電話に出て会話をすることもできない。だから、電話に出て、一通り話を聞き、それを両親に伝えるのはぼくの役割だった。

来客があったときも同様だ。近所の人たちであれば、両親の障害を理解しているの
で問題はない。けれど、役所の人や飛び込みの営業担当者など、両親の耳が聴こえないことを知らない人が訪れたときには、やはりぼくが前に出る。事情を説明し、彼らが話したいことを、音声言語で成り立っている社会からの情報を、聴こえない親に伝える。その行為はまさに「通訳」だったと言えるかもしれない。

この通訳という行為は、コーダなら誰もが多かれ少なかれ体験していること。就学

前の幼児期から通訳をしていた、というコーダは過半数を超えるとも言われている。その場面も人によってさまざまだ。前述のように電話応対や来客があったときのみならず、テレビから流れてくる情報を伝達する、病院や銀行、保険会社の担当者に対し、親の代理として交渉する、といった場面もある。

けれど、コーダはこれを特別なことだとは思っていない。少なくとも、この時点では。

幼少期のコーダにとって、親の耳が聴こえないことは当たり前で、ふつうのことなので、そのことについて特に深く考えることもない。聴こえる家庭の子どもが、「どうしてぼくの親は耳が聴こえるんだろう」と悩んだりしないのと同様に。ところが、そこにちよつとずつ歪みが生じてしまう場合がある。その原因となるのは、他者からの「眼差し」だ。

それまで家庭という最小のコミュニティが世界のすべてだった子どもが、初めて大きな社会と接するようになるのが小学校に上がったときだろう。そこでコーダは、最初の壁にぶつかってしまう。

「頑張っていて偉いね」という
言葉に違和感を覚える

ぼくが両親のことを「ふつうではない」と自覚したのも、小学生になってからのことだった。それはクラスメイトが初めて家に遊びに来たときのことだ。

突然、友人を連れて帰ってきたぼくを見ると、母は驚きつつうれしそうな表情を浮かべた。そして、友人に向かって口を開いた。

「よく来たね」

母は口を大きく開き、精一杯正確な発音でそう言ったのだと思う。けれど、その場に響いたのは、うまく聞き取れない不明瞭な言葉だった。文字にすれば「おういあね」。普段ろう者と触れ合う機会がない友人の耳には、とても奇妙な喋り方として聞こえただろう。

その後、部屋で遊んでいると、友人があっけらかんと言った。

「お前んちの母ちゃん、喋り方おかしくない？」

たしかに、他の子の母親はみな、はっきりと喋ることができる。手話を使わなくて

も、口話だけでコミュニケーションが取れる。でも、ぼくの母はそうではない。

そして、そんな母はおかしいと評されてしまうのだ。

このときから、ぼくは母を、そして父のことも、「ふつうではない」と認識するようになっていった。

こういった体験を、特異なこととは決して言い切れない。いまでこそ多様性が謳われるようになり、他者との「違い」を認めていこうという風潮になりつつあるものの、ぼくが子ども時代を過ごした80年代から90年代前半は、まだ障害者への差別や偏見が根強く、しかもあからさまだった。障害者が子孫を残さないように、と強制的に中絶・不妊手術を受けさせられる悪法「優生保護法」が1996年まで残っていたくらいだ。もちろん、この恐ろしい法律は聴覚障害者も対象にしていた。

そんな時代を過ごしたコーダたちは、多少なりとも自身も差別や偏見を目の当たりになっている。

この例とは逆に、善意による差別に苦しんだというコーダも存在する。彼らが日常的に浴びせられていたのは、「頑張っていて偉いね」「親を支えるなんて大変だね」と

いう「^{ねむい} 寝い」に包まれた偏見だ。

繰り返すが、コーダにとって通訳は当たり前のことであり、幼少期は特にそれ自体を「偉いこと」「大変なこと」だとは思っていない。ところが、周囲の大人たちによるコーダを労うつもりという言葉は、コーダのなかに疑問が生まれるきっかけを作ってしまうのだ。

自分はそんなに頑張っているのだろうか。

自分の置かれている環境は、大変なのだろうか。

そのように芽吹いた疑問の種は、やがてコーダを苦しめることにもつながっていく。

好きなのに嫌い、嫌いなのに好き
相反する感情で揺れ動くコーダたち

このようにコーダは自分自身のなかにある価値観と世間のそれとの「違い」を痛感することが多い。その結果、コーダのなかにはふたつの相反する気持ちが生まれる。

ひとつは「聴こえない親を否定する気持ち」だ。どうして自分の親は聴こえないのだろう、という想いに端を発し、「聴こえる親が欲しかった」「聴こえない親なんて恥

ずかしい」と親そのものを否定する考えにさえ発展してしまう。それがエスカレートしていくと、親の存在を隠すような行為にまで及ぶ。

思春期の頃は、ぼくもそちらに傾いてしまうことが多かった。自宅に友人を呼ばなくなり、学校では親のことを話題に出さなくなる。それどころか、運動会、授業参観、学芸会、そういった行事に親を呼ぶことも躊躇ってしてしまう。

一方で、「親を守りたい」という気持ち」も強くなっていく。世間の無理解や偏見を目の当たりにすることで、それにさらされている親を守ってあげられるのは自分だけなのだ、という使命感が生まれるのだ。それは親からもらった愛情を返してあげたいという気持ちからくる責任感でもあれば、もっと単純に「聴こえなくなつて、親のことが大好きだから」という親愛の表れでもある。

思春期の子どもは一般に、親への親愛と反発との狭間で揺れ動くものだ。好きなのに嫌い、嫌いなのに好き。この矛盾する感情は誰もが一度は体感することだろう。けれど、特にコーダの場合はその振幅が極端になってしまふ。聴こえない親なんていくなればいいのにと否定的になったかと思いきや、聴こえない親を守るのが自分の使命のたと肯定的に捉えることもある。表裏一体でもある両極の感情を行ったり来たりしながら、コーダは常に揺れ動く心を抱えて生きるのだ。

「ろう者になりたい」と願う
コーダ特有の複雑な気持ち

そしてもうひとつ、コーダ特有の気持ちとしては、「自分の耳も聴こえなければよかったのに」というものがある。本書を読んでいる聴者ちようしゃからすれば、その気持ちはおよそ理解できないものだろう。しかし、これもまた珍しいものではない。

どうしてコーダはそう思ってしまうのか。それは親とのコミュニケーションに悩みを抱えるからだろう。

聴こえない親が手話を大切にし、子どもに一生懸命教える家庭ならまだいい。けれど、すべての家庭がそうではない。実際、ぼくの家では手話よりも口話を優先していた。しかし、あくまでも両親は聴覚障害者。どんなに頑張っても、聴者のように「話せる」ようになるわけではない。

一方で、ぼくは手話が上手ではなかった。見様見真似みようみまねで覚えることにも限界があり、正しい手話を身に付けられなかった。その結果、ぼくは両親との間に「共通言語」を獲得する機会を失ってしまったのだ。

すると、次第に親子間でのコミュニケーションに問題が生じてくる。友人関係の悩みや勉強における疑問、些細なトラブルなどを相談したいのに、うまく伝えられない。中途半端な手話と、完全に理解できるわけではない口話をミックスさせ、いくら頑張っても伝えようとしても、言いたいことの半分も伝わらないのだ。それが「どうしてわかってくれないんだ」という怒りに変わることもあれば、「自分がろう者だったら、親とのコミュニケーションで悩まなかったのではないか」というどうしようもない想いに変化することもあった。

もしも、自分の耳が聴こえなければ、「両親との会話で悩むこともなかったのではないだろうか。聴覚障害者である親と聴者であるコーダは、親子でありながら使用する言語が異なるという特殊な環境に置かれている。ゆえに、「ろう者になりたい」と願ったことのあるコーダも少なくない。

聴こえない世界と聴こえる世界を行き来するなかで、どちらの世界にも居場所を見つけれない人もいる。ぼく自身もそれに近かった。自分は聴者でもなく、ろう者難聴者でもない、非常に中途半端な存在なのではないか。だからこそ「親と同じろう者になること」を望み、自身の立ち位置をはっきりさせようとする。

これもまた、コードが抱く複雑な想いの一片だ。

このように、コードには知られざる面が多々存在する。ゆえに、大人になってもいまだ生きづらさを抱えているコードも少なくない。ぼくも含め、コードが生きやすい世界の実現のためにはなにが必要なのか。それは、まず「コードのことを知ってもらおう」、これに尽きるのだと思う。